

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——（十三）

津守 真

四歳児のつくるもの——それぞれの子どもの心の中にあるものを表現すること

四歳児の一学期、子どもたちには、それぞれ、こんなものを自分の手で作ってみたいという気持がある。だれかが作り上げるのを見るのはなく、自分で材料を選び、自分の手を使って、折り、たたみ、貼り、はさみで切り、セロファンテープでつなぐなど、自分がその作業の中に入りこむことによって、自分の気に入るものを作り出す作業である。

そこには当然、その子どもの個性がはたらく。こんな風なのを作り出したいという子どもの望みは、子どもによって違う。ある過程の後に、それができたとき、子どもはそれが自分らしいものになっているときに満足する。自分が思っていたものが、自分の手でそこに実現されたことの喜びである。自分らしさが表現されたことの満足である。こういう喜びや満足は、教育において非常に重要なものである。

おとなはしばしば、作業の結果の社会的側面を重視する。しかし、それぞれの人の自分らしさが加わるときに、その作業は、より人間に身近なものとなり、創造的なものとなり、次の作業を生

み出す原動力となり得るであろう。教育の過程においては、一挙

におとなの社会の通念に合致するものが求められるのではなく、子

どもが自分らしいものを作ることの積み重ねによって、子どもら

しい自信と喜びを得てゆくことがたいせつであると思う。

たしがいま使うから」

P 「ちょっとくれない。ちょっとぴりだから」

Aはそれをとつて、テーブルの反対側におく。

母親「もつとなないかな、けんかしないようだね」(きれいな紙

がないか探す)

六月九日
Aは、箱の側面に、いろいろな色の星型を色紙から切り抜いて貼る。

Pは、母親にもらった梅干のレッテルを二つに折り、のりでつけている。

Aは「もうときれいにしよ。そうしてね、あたしここのところもうときれいにするの」と言いながら、折紙を小さく切っている。

その上に貼り、色紙をそのわきに貼っている。それから、ピンク

の花模様の折紙を、小さく花形に切り抜

いて、平たい箱の横の側面に貼っている。

Aは何かきれいなものを作ろうとしているように思われる。(図1)

傍で、Pがピンクの花模様の折紙をとつて切ろうとすると、

A 「それ、とつておいてくれない、あ

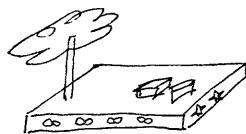


図 1

きれいなものを作ろうというのは、実現したい理想の一点があることである。子どもはそこに向かって作業する。その一点にうまく合致しないとその仕事は終わらない。こうして理想に向かって進み動いている時には、自分が使おうと思っているのに、他人が手をふれることを許さない力強さがある。もうしばらくすれば、他人に対しても寛容になる場はもっとひろがるだろう。しかし、ここでは、他人をよせつけない程に、この小さな作業が子ど

もにとつては本気なのである。

だから、花模様の折紙を、他の子どもが使いたいというときに、傍にいるおとなは、かしてあげなさいという気になれないのは当然であろう。そういうことによって、寛容さや他人に対する思いやりを育てることにはならないだろう。それはおとながことばで注意することによって成しとげられることではなくて、もつと違う場面で、子ども自らが獲得してゆく時があるのでと思う。

しかし、それでもなお、こういう場面に当面すると、小さな場面ではあるけれども、おとなは当惑する。そして、もう一方の子どもにも、その求めているものを実現するのにどうしたら手をかせるかをとつさに考えて、他の紙をさがす。

Pは、のりのついた手拭きたぬき、何度も拭いてからもどつときどき、Aに、「わよっとかしてね」と星のついている色紙をとる。

A「いいわよ、もう使わないから」
Pは星を切り抜く。

A「これでいい、こんなにすてきなおふねなの」
Aは、これでいいと自分で満足している。これは、きれいに飾ったすてきな舟を作っていたのだということがわかる。こうし

て、自分自身で、終わつたという認識ができると、他人に使わせることは容易である。

Aがすてきなものを作ろうとし、自分の中に描いた理想を迫り求める心の傾向は、四歳の一学期のこのころに描かれた描画にも示される。Aは、きれいな色模様で飾った人物画を何枚もかく。自分自身や友だちを、できるかぎり、きれいなものとしようとする理想像でもある。

実現したいと思うものに自分でゆきあたり、活動はじめた子どもは、しばらくの間は放つておいても自分でやってゆける。まだ、探し求めている方の子どもにおとなはエネルギーを注ぐことになる。

私は、数種類の箱を出してどれでも使えるようにしておいた。

Pはその中から、格子形のへぎをとり出し(図2)はさみで切り、引張つてはがし、「ああ、こうなつちやつた」という。Pはいつも格子形に興味がある。それを分解することは、この子どもにとって意味のある行為であることは、日頃つき合っている者にとってはよく分る。この場面だけを見たら、Pが何故この材料を選

び、興味をもつたかを理解することは困難であろう。保育においては、子どもにとって本来意味のあることでも、それを読みとれないことは非常に多い。保育者としては、その時に自分にとって意味が明瞭でないからといってその行為を否定するのではなく、そのあとに展開される行為を関心をもって見つづけることが必要である。

Pは、折紙を小さく切り、「こうやると、きのこみたいね」と

いつて、へぎの一本の端に折紙をおき、さらに、そこに糸をつけ、セロファンテープで貼ろうとする。セロファンテープをつけようとする、どれかが落ちて、なかなかうまくいかない。落ちると拾って、ようやくその三つを貼り終えると、糸をぶら下げて



図 2

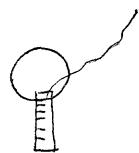


図 3

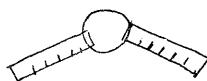


図 4

は、歯ブラシになつている。

ここに見た作品は、いずれも、動きがその特質となつてゐる。

格子形は、縦横の方向の転換する動きであり、糸でぶら下げる動き、シンメトリーを作り出す動き（本誌、七十五卷十一号参照）、歯と歯ブラシと対応させて動かす動き等、この子どもは動きそのものに関心がある。

ここで、同じテーブルの上で作っていても、AとPとでは、作品の性質は正反対とすら言える。Aは、不動の理想に目を捉えて、最もきれいなものを実現しようとしたし、それに対して、Pはあちらからこちらへと動くものを作ろうとする。一方が動くことのない重みをもつた存在であるときには、そこにいるもう片方は、その中に入りこむ余地がなく、それとは別のものになつてゆくといふダイナミクスが働いているとも言えよう。

みる。ぶらぶら動く。（図3）

それから、刻みの入った長いへぎを一本とり、画用紙を小さく切つて、それに貼ろうとするが気にいらない。画用紙をもつと大きく切り、へぎをおいてみる。そこをおさえて、セロファンテープで貼る。これは、シンメトリーの形である。（図4）

次に、へぎを口にあて、「こうやるみたいなの」と言つて、「歯

をみがきましょう」の歌をうたう。刻みのついたへぎは、ここで

それはまた、それぞれの子どもの個性に合致しているので、その場面でこういう相異った動きをするともいえよう。個性も場面も、もとはと言えば、切り離すことのできない一つのものである。おとな同志、あるいは、おとなと子どもの関係にも、類似のことがある。確信をもって生きる確固たる存在の傍では、しばしば、逆のものが育つのを見る。いずれにせよ、Pはここで動くものを作ることによって満足した。

六月十三日

このころ、母親は、よく毛糸で人形を作った。夜になつて、編みかけの毛糸の人形が落ちていたのをPが見つけて、毛糸を編棒でいじりながら、「お人形さんの作り方おしえて」と言う。それで結局できたのが、画用紙を切り抜いた二片の形に、毛糸の両端をセロファンテープで貼りつけて、ぶらぶら動くようにしたものである。母親も人形を編みはじめ、子どもたちは落着いて、そのまわりでいろいろ作りはじめた。

この日は、AとPの間には、何ら葛藤はない。それぞれ、互いに見ながら、しゃべりながら、自分の思うものを作る。よく遊ん

で皆満足である。その結果できたものを見ると、Aは小さなものをいろいろかいて切り抜き、袋を作つて、それに入れるようにしたものであり、Pは、紙を切つて丸めてセロファンテープで貼つたり、毛糸をぶら下げたりしたものである。ここにも、前と同様の個性の相異がみられる。

ここに引用したPの作品は、Pが三歳の時のものである。Pが四歳の一学期に作ったものも、引き続いて動きをテーマとするものが多く、Aと対照的である。

Pの四歳の一学期には、切り抜いて作るものが多いた。折紙の中央に窓をあけて、その窓の後側に紙を貼り、黄色の点を描いて、「お星がひかる　びかびか」と歌つて、窓を開いたり閉じたりする。クレヨンを十一色使ってうずまきをかき、切り抜いて「コップしき」という。コップをのせたり、とつたりする動きのある場所である。また、頭部と胴体とを別々に作つて、切り抜き、その両者を刻み一つにつなげて動くようにする。また、折紙を二つ折りにして、はさみで切つてから開くとシンメトリーの形ができることを予想して、いくつも切紙図案を作る。

いずれにしても、自分が心の中に実現したいと願うものがあり、それが実現して満足したときの作品は、でき上りはきれいでなくとも、どこか子どもらしい魅力をもつてゐる。これは、子ど

もの心の奥に動くものがそのままに表出されているからである。

もしも、Aのような個性をもつた者と、Pのような個性をもつた者とに、同一の形を作る課題を与えたたらどうなるだろうか。それでも、どこかにその個性はあらわれるだろう。しかし、どちらの子どもも、そこで作ったものは、おざなりと感じ、自分自身を表出した実感と満足感は得ないであろう。

しばしば、子どもたちは、幼稚園や学校は、自分の本当の力を出すところではないと思うようになり、本当の生活は家に帰ってからだとうておく。そして、園や学校の生活が長くなるほど、子どもの内心の不満がたまってゆくことになる。

幼稚園や学校は、子どもが自分らしく何かをやったという実感をもつた体験を与えることを必要としている。

丁度この原稿を書いているときに、附属幼稚園で体験したことがある。二学期になつてから（九月十日）私は砂場で子どもの相手をしていたとき、男児Sが部屋から出てきて、私の肩を叩き「ほら」と言って、見せたものがあった。画用紙を数枚、不細工にセロアーンテープでとめて箱のようにし、頂上に円筒をつけた

ようなものだった。私はとっさに何か返事をしなければと思い、あ、煙突つけたんだねと言つた。Sは、「ちがうよ」と言つたので、私はこれをバトカーかと氣付いた。それで私はウ——といふと、「ちがうよ、ピポピボ ピボ」と言つて、それをもつて走り去つた。

その日に、一人の学生がSのことをたまたま、一日観察をしていた。それで知り得たことなのであるが、Sはこの日は朝からいらして、クラスの担任のH先生がこの子どもと二人で何かを作ろうとしているときも、この子どもはいらいらしていた。それからしばらくしたら、Sは自分の作業に熱中しており、かなり長時間の後に、私に見せにきたバトカーを作つて、担任のH先生をさがしたが見付からず、私に見せにきたのだった。そして、それをもつて庭中走りまわつてH先生をさがしているうちに、帰りの時間になると、上靴にはきかえることも省略して、H先生に見せにいった。

私はこの觀察をきいて、Sはこの日に、自分らしいものを作ることを喜びを体験したのであると思った。もしかしたら、自分の心の中にあるものを立体的な作品として表現したはじめてのものであつたかもしれない。でき上りは私が煙突と間違えるほどの不格好なものだった。けれども、それはどんなに形が整つたものよりも、

自分の心の中にあるものを、自分の手で実現したものであつたことで、この子どもにとっては、他人に見せたいと思う程、得意であり、満足のゆくものであったことはたしかである。

さらにまた、この子どもがそのような作品を作るに当つて、H

先生の果した役割は大きかった。この子どもが何か心にあるものを実現したいができないでいらっしゃっている様子を見て、この子どもと一対一でつき合い、何かを作るきっかけを与えた。そこで何を作るかを指示したのではなく、(そんなことが、この子と向かい合つて、できるはずはない。いろいろと提案してみることはできるが、それを選び、あるいは探しあてるのは子ども自身である)一緒にいて、いろいろと材料を出したり、言つてみたりして相談にのつたのである。そうしている間に、子ども自身の中で、自分がしたいと思っていたことが次第に明瞭になり、それからあとは、自分で作り上げ、自分らしいものがそこに生れたのである。

(つづく)

訂正とお詫び

本誌七十六巻十一号に掲載された図書紹介、フレーベル「母の歌と愛撫の歌」の発行所所在地及び電話番号に誤りがありましたので、次のように訂正し、お詫び致します。

発行所 キリスト教保育連盟
住所 東京都新宿区西早稲田二一三一八一七五
電話 (二〇四) 三三一八六

—編集部—

